

フィリピン英語留学が言語態度に与える影響

—日本人学習者を対象としたインタビュー調査から—

Studying English in the Philippines and its

Influence on Language Attitudes:

Analysis of Interview Data from Japanese Learners

相模女子大学教授 羽井佐 昭彦

HAIISA Akihiko

(Sagami Women's University)

キーワード：共通語としての英語、言語態度、海外留学

1. はじめに

近年、英語力向上を目指してフィリピンに留学する日本人学習者が急増している。フィリピン政府観光省の推計によるとフィリピンに英語留学をする日本人の数は、2010年におよそ4,000人であったが、2013年には約26,000人と6倍以上の増加を示し、2014年には30,000人を超え、その勢いは増すばかりである。フィリピン英語留学の人気は、何と言っても留学費用の安さである。欧米への語学留学に比べ、費用が半額から3分の1程度と言われており、アメリカやイギリス、カナダ等への留学費用は捻出できないが、フィリピン英語留学ならなんとかなるという潜在的な留学希望者にとっては大きな魅力となっている。

しかし「安かろう悪かろう」では、これほどの増加に至ることは考えにくい。フィリピン英語留学のもう一つの魅力は、人件費の安さによって生み出されたマンツーマン教育である。授業の大半がフィリピン人講師との1対1の英語学習という形態を取るため、グループレッスンに比べて学習者の発話時間は圧倒的に多くなる。1対1であるため、ずっと黙っていることは許されず、学習者は英語を使わざるを得ない状況に置かれる。またグループレッスンでは、英語に自信のない日本人学習者はどうしても他人の目を気にして英語使用をためらう傾向がみられるが、マンツーマンの場合は個室であるため、臆せずに英語を使うことができるメリットもある。

安価な留学費用とマンツーマン教育の2つがフィリピン英語留学の大きな魅力であり、ほとんどの留学斡旋業者がセールスポイントとして打ち出しているところであるが、本稿ではフィリピン英語留学のもう1つの視点を提案したい。それは、この留学がアメリカ、イギリス、カナダ等の英語圏への留学と異なり、学習者が英語母語話者からではなく、英語非母語話者から英語を学ぶという点である。フィリピンでは英語が公用語であるが、フィリピン人講師にとって英語は第二言語であり、学習された言語である。フィリピン英語留学とは、英語母語話者がいない状況のなかで、共通語としての英語(English as a Lingua Franca)を媒介としてなされる英語教育という特殊な留学形態と位置づけられる。

フィリピン留学を希望する学習者は、費用の安さやマンツーマン教育に惹かれて留学を決断するのだが、共通語としての英語を媒介とした英語教育であることを意識して留学する人はほとんどいない。しかし、世界の英語使用の現実を考えると、第二言語あるいは外国語として英語を使用する英語非母語話者のほうが英語母語話者よりもその人数は圧倒的に多く、ビジネス界では英語非母語話者間での英語によるコミュニケーションの重要性は高まる一方である。

本研究では、共通語としての英語使用という観点から、フィリピンでの英語留学経験が日本人学習者の言語態度に与える影響について考察する。

2. フィリピン英語留学について

フィリピン英語留学は、もともとは韓国人がフィリピン人の高度な英語力と安価な人件費に着目し、韓国人の英語力向上のために1990年代中頃に始めたビジネスモデルである。韓国人留学生の需要は着実に伸び、現在ではフィリピン国内に大小合わせて500校以上の英語学校があると言われている。韓国人留学生のマーケットはもはや飽和状態にあり、今は日本人留学生が新たなマーケットとして需要を伸ばしているのが現状である(渡辺・羽井佐、2014)。

英語学校のほとんどが全寮制のシステムを取り、留学生は1~4人部屋のどれかを選んで生活する。食事や洗濯、部屋の掃除なども費用に含まれており、留学生は英語学習のみに集中できる環境が整っている。留学生は多くの場合、日曜に到着し、月曜にオリエンテーションとレベルチェックのテストを受け、火曜から授業に入る。留学期間はまちまちで、1週間だけの短い留学から3~6ヵ月と長期にわたる留学生もいる。授業は小さな個室でフィリピン人講師と留学生が1対1で授業を受けるマンツーマン教育が主体であり、1日の総授業時間数6~8時間のうち4~6時間をマンツーマン教育が占め、2~4時間がグループレッスンとなる。

3. 研究方法

調査対象者は2013年7月6日に東京・渋谷で行われた「太田英基氏の講演会」の参加者から計7名、調

査者の知人の紹介から1名の計8名の留学予定者の協力を得ることができた。調査対象者（以下、研究参加者或いは参加者と表記）は講演会等からランダムに募ったため、年齢、性別、身分、英語力などの面で多様な参加者が対象となった。表1が研究参加者のリストである。

表1：研究参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
性別	男	男	男	女	男	女	女	男
年齢	24	22	40	21	21	26	25	31
身分	大学院生 理系	大学生 文系	社会人 IT関係	大学生 文系	大学生 文系	社会人 ワーホリ	社会人 ワーホリ	社会人 IT関係
留学場所	セブ	セブ	バコロド	タラック	マニラ	セブ	セブ	バギオ
留学時期	8月中旬～	9月下旬～	8月上旬～	9月下旬～	9月下旬～	9月下旬～	9月下旬～	11月上旬～
留学期間	1ヵ月	4ヵ月	2ヵ月	2ヵ月	3週間	2ヵ月	5ヵ月	6ヵ月
留学前 IV	7/10	7/10	7/10	7/23	7/23	8/14	8/14	8/2
留学中 IV	-	10/25	9/11	-	-	10/25	10/25	-
留学後 IV	12/11	2014/3/20	12/11	-	2014/3/20	-	-	2014/6/6

IV=インタビュー、ワーホリ=ワーキングホリデー準備、留学開始年：2013年

調査方法は、留学前・留学中・留学後の参加者へのインタビューにより言語態度の抽出を試みた。グループインタビューの形式を取るケースが多かったが、グループでのインタビューが難しい場合は、個別のインタビューを行った。留学前インタビューでは5つの質問（①留学先としてなぜフィリピンを選んだか、②フィリピン英語留学に対する印象、③フィリピンの英語に対する印象、④英語学校を選んだ基準、⑤フィリピン英語留学に何を期待するか）に焦点を当てて実施した（Haisa & Watanabe, 2014）。留学中・後については、4つの項目（①実際の英語学校の様子と満足度、②フィリピン人の英語、③授業外での交流、④今後の英語学習）の観点から留学前の考えと現実の経験を比較して語ってもらうことを中心に進めた。

留学前は全員にインタビューできたが、留学先、留学時期、留学期間が様々だったため、最終的に留学前・中・後の全てのインタビューができた参加者は2名のみ、留学前・中のインタビューができた参加者が2名、留学前・後のインタビューができた参加者が3名、そして1名の参加者は留学中・留学後もインタビュー日程の調整がつかず、留学前のインタビューのみとなった。したがって本稿では留学中と留学後のインタビューはまとめて扱うこととした。

4. 結果と考察

本研究のインタビューでは、フィリピン英語留学への参加者が英語に対してどのような言語態度を持っているかという全体的な特徴をつかむことを目的としたため、大まかな質問にそって自由に話してもらい、そのなかから参加者の言語態度を拾い上げることを試みた。その結果、参加者たちの言語態度として、英語母語話者の英語をターゲットとして指向する態度、フィリピン人講師の英語に対する寛容性、フィリピン人講師の英語に対する好意的態度、という3つの特徴が浮かびあがった(渡辺・羽井佐、2015; 羽井佐、2015)。

4.1 英語母語話者の英語をターゲットとして指向する態度

本研究の聞き取り調査ではどの英語をターゲットモデルとするかという点について、質問項目に含めてはなかった。しかし話の流れのなかで、この点についての言及があり、この項目は言語態度の変容を調査するうえで重要であると判断したため、インタビューデータからわかることについて明示的・暗示的両側面から可能な限り抽出を試みた。したがって、参加者からその項目について明示的言及がなかったものについては、言語態度が不明であるため、表では「-」と表示した。また参加者全員に留学前・中・後の全てでインタビューができたわけではないので、インタビューができなかった参加者については「NA」と表示した。

表2は、英語母語話者の英語をモデルとして指向していることを明示的或いは暗示的に示唆した参加者である。

表2：英語母語話者の英語をターゲットとして指向する態度

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学前	-	○	-	-	○	-	-	-
留学後	○	○	-	NA	○	NA	NA	○

“B”と“E”は、もともとは英語母語話者圏への語学留学を希望していたが、費用の関係でフィリピン留学にした参加者である。フィリピンでの英語留学後もその態度に変化は見られず、むしろ英語母語話者の英語をターゲットとする指向が強まったことが確認された。特に“B”は留学後のインタビューで「発音がネイティブに近ければ近いほどコミュニケーションが取りやすくなると思う…元々ネイティブのようになっていたと思うので、まずはそこを目指している」とはっきりと述べていた。これは、台湾人大学生がフィリピン留学で英語変種と接触した後も英語母語話者の英語をターゲットモデルとする態度に変化が見られなかったとするKobayashi (2008)の研究結果と共通するところである。

また留学前に英語母語話者の英語について言及のなかった“A”と“H”も、留学後のインタビューでは英語母語話者圏での留学を指向する態度が見られた。“A”は「次にもし留学するとしたらイギリスとかに行きたい」と言及していたし、“H”も5ヵ月間フィリピン人講師から英語を学習した後、その英語がどれだけネイティブに通用するかを知るために、最後の1ヵ月をフィリピン国内にあるオールネイティブの英語学校に通ったとのことであった。

表3は、英語母語話者の英語をターゲットモデルとするという明示的な言及はなかったものの、留学中・後のインタビューでフィリピン英語留学を英語母語話者とのコミュニケーション準備として位置づけていた参加者を示したものである。

表3：フィリピン英語留学を英語母語話者とのコミュニケーション準備と位置づけ

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	○	○	-	NA	○	○	○	○

この表からもわかるように、“C”を除いた全員がフィリピン英語留学を英語母語話者とのコミュニケーションのための準備段階と位置づけていたことがわかる。“F”と“G”は、フィリピン英語留学を、オーストラリアでのワーキングホリデーを成功させ、そこでの生活をより実りあるものにするための英語力鍛錬の場として位置づけていた。表2と表3の結果から、本研究の参加者のほとんどが多かれ少なかれ英語学習の最終ゴールとして、英語母語話者に通じる英語の習得を目指していることがわかった。英語母語話者の英語をターゲットモデルとする日本人英語学習者の傾向は、Matsuura *et al.* (1994)、Chiba *et al.* (1995)、Matsuda (2003)の研究で指摘されており、その傾向は本研究においても同様に見られた。

4.2 フィリピン人講師の英語に対する寛容性

本研究では、英語非母語話者であるフィリピン人講師の話す英語に対し、参加者がどのような態度を持ち、それがどう変容するのかということが重要なポイントであったため、全ての参加者にフィリピンで話される英語変種についての質問を試みた。変種という専門用語は参加者にはわかりにくいため、インタビューではフィリピン訛りという言葉を使用した。表4は「フィリピン英語の訛りをどう思うか」という質問に対する結果である。

表4：フィリピン英語の訛りに対する不安感を抱かない参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学前	○	○	○	○	△	△	○	○
留学中・後	○	○	○	NA	○	○	○	○

留学前のインタビューでは2名の参加者がフィリピン英語の訛りに対し多少の不安を示唆したものの、残りの6名は不安感を抱いていなかった。そもそもフィリピン英語に大きな不安を抱いていたらフィリピンを留学先として選んでいないはずなので当然の結果とも言えるが、留学中・後でのインタビューでも、参加者全員が強いフィリピン訛りを感じることはなく、不安感もなかったと言及していた。これにより参加者が留学後もフィリピン人講師の英語に満足していたことがわかる。

その一方で、表5は、自分の英語力がフィリピン訛りを認識できるレベルではないと言及していた参加者を示したものである。

表5：フィリピン訛りが認識できる英語力のレベルではないと感じている参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	-	○	○	NA	-	○	○	-

フィリピン人講師の英語に強い訛りは感じなかったと述べていた7名中4名が、実際は訛りがあるかどうか分かるレベルに自分の英語力が達していないことを指摘していた。このことは、本研究の参加者が日本の英語教育において様々な英語変種に触れる機会が少なかった可能性を示唆するものでもある。

表6は、コミュニケーションが取れれば、英語の訛りは問題ないと感じている参加者を示したものである。

表6：コミュニケーションが取れれば訛りは問題ないと感じている参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	-	○	○	NA	-	○	○	-

留学中・後でインタビューできた7名中4名が訛りよりもコミュニケーションが取れることの重要性を指摘していた。ここで興味深いことは、留学前には、ターゲットモデルとして英語母語話者の英語を強く指向していた“B”も、フィリピン留学をオーストラリアへの準備段階と位置づけていた“F”も、留学中・後のインタビューでは英語変種に対する寛容的な態度を示していたことである。英語母語話者の英語をターゲットモデルとしつつも、英語を実践的なコミュニケーションツールとして捉え、訛りよりも英語が使えることを重視するメンタリティーを垣間見ることができた。

Hanamoto (2013) は、英語母語話者と英語非母語話者の両方の英語変種にさらされた参加者は英語非母語話者の話す英語に肯定的な態度を示す傾向のあることを検証したが、本研究においても同様の傾

向が見られた。フィリピン人講師によって話される英語変種に触れることによって、日本人英語学習者の英語変種に対する寛容性がさらに増した可能性が十分考えられる。

4.3 フィリピン人講師の英語に対する好意的態度

留学中・後でのインタビューでは、フィリピン人講師の英語に対する好意的な態度を示すコメントや意見が数多く見られた。これはフィリピン人講師の英語変種についての質問に伴って出てきた意見であるが、共通語としての英語を考えるうえで重要な視点を提供するものである。

表7：フィリピン人講師の英語のわかり易さについて言及した参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	○	○	○	NA	○	○	○	○

表7は、フィリピン人講師の英語のわかり易さについて言及した参加者を示すものだが、有効回答者全員が「フィリピン人講師の英語はわかり易かった」とコメントしていた。

表8は、フィリピン人講師の使う英語がわかり易い理由として、具体的にスピードや発音の調整をあげていた参加者を示すものである。

表8：わかり易さがスピードや発音の調整と言及した参加者

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	-	○	○	NA	○	-	-	○

“B”は帰国後にシェアハウスで外国人と生活し、その英語母語話者との比較でフィリピン人講師の英語の明瞭さを指摘していた。また“E”も「日本人に聞き取りやすいような発音をしてくれる」とフィリピン人講師の発話調整について言及していた。英語母語話者が英語を教える場合もスピードや発音、単語や構文などの調整をされると思われるが、フィリピン人講師の英語のわかり易さは英語母語話者の場合とどこがどう異なるのかを探究することは、共通語としての英語を考察するうえで今後の重要な研究課題だと考えている。

表9は、2名ではあるが、フィリピン人講師が自分の不完全な英語を理解してくれるとコメントした参加者を示すものである。

表9：自分のへたな英語も理解してくれる

参加者	“A”	“B”	“C”	“D”	“E”	“F”	“G”	“H”
留学中・後	-	-	○	NA	-	○	-	-

“C”は「フィリピン人講師はこっちの言いたいことを何とか読み取ってくれる」、「F」は「私のへたな英語でも先生は理解してくれる」と言及していた。自分の英語に対するフィリピン人講師の理解について言及した参加者はたった2名ではあったが、相手の英語を理解しようとする態度も共通語として英語が使われる環境では大切な要素であると考え、取り上げた。フィリピン人講師は韓国人や日本人を教える機会が多く、日本人の英語変種に慣れていることは十分に推測できる。

以上、フィリピン英語留学が日本人英語学習者の言語態度にどのような影響を与えるかについての探究を試みてきた。その結果、英語母語話者の英語をターゲットモデルとする態度が留学前・中・後を通して根強く残っていることがわかった。この態度は「ネイティブのように英語が話せたらなあ」という単なる願望の可能性もあり、現実的に実現可能なゴールとして位置づけられていたかどうかは定かではないが、少なくともフィリピン人から習う英語の次の段階は英語母語話者の英語だとする意識があることは事実のようである。フィリピンを英語留学先として選んだ参加者でさえそうであることを考えると、これは日本人英語学習者全般の傾向と言えそうである。

その一方で、留学前・中・後を通して、フィリピン人の英語に対する寛容性も1つの大きな特徴として明らかになった。英語母語話者をターゲットとしつつも、フィリピン人から習う英語への抵抗感はないのである。コミュニケーションが取れば訛りは問題ないとする参加者もあり、フィリピン留学参加者の英語変種への許容度が高いことがわかる。さらに実際のフィリピン英語留学体験を通して、特にわかり易さといったフィリピン人英語への好意的な態度が増長されたことは貴重な発見である。

5. おわりに

英語留学と言うとまず頭に浮かぶのが英語圏への留学だろう。アメリカ、イギリス、オーストラリアといった英語圏への語学留学プログラムは数多く紹介されているが、英語圏と言っても選ぶ国によって学習する英語の変種は大きく異なる。また世界に目を向ければ、それこそ様々な英語変種が至る所で話されているのが現実である。英語が共通語としての機能を果たす度合いは今後ますます高まり、コミュニケーションの相手は必ずしも英語母語話者ではなく、様々な英語変種の話者であるケースがさらに増えるだろう。

日本の英語教育界における「共通語としての英語」への認識は徐々に浸透し始めてはいるが、本研

究の参加者のコメントを聞くと最終的なターゲットモデルはやはり英語母語話者の英語だという意識が根強く残っていた。英語母語話者の英語を目標にすること自体は決して悪いことではないが、もしその英語が完全な英語で、それ以外の英語が不完全なものだという潜在意識があるとすると、英語学習のハードルが高くなり、英語学習の阻害要因となる可能性もある。

英語母語話者の話す様々な英語変種も含め、英語非母語話者の英語変種も同等の変種として優劣をつけずに捉える意識づけができると、英語学習への考え方も大きく変わるのではないだろうか。ハリウッド映画が好きでアメリカ英語を1つの変種としてターゲットとする人がいても良いし、聞き取り易いフィリピン英語やアジアで使える英語を1変種として目指す人がいても良い。また日本人の話す英語も1つの変種として捉え、日本語訛りの英語も許容する態度が出てくれば、英語を使うハードルはさらに下がることになる。英語を共通語として捉え、使えるようにするためには、様々な英語変種が世界で話されており、それを認め、受け入れる態度を持つことが重要である。現在人気が高まっているフィリピン英語留学はその意識づけを持たせる1つの良い機会になると考えている。

<参考文献>

- Chiba, R., Matsuura, H. and Yamamoto, A. (1995). Japanese attitude toward English accents. *World Englishes* 14, 77-86.
- Haisa, A. and Watanabe, Y. (2014). Language Attitudes of Japanese Learners Who Are Planning to Study English in the Philippines. *The Journal of Sagami Women's University (Humanities)*, Vol. 77A, 1-7.
- Hanamoto, H. (2013). How does the experience of exposure to non-native English varieties relate to learners' language attitudes toward EIL?: A mixed quantitative and qualitative study of Japanese students of science and engineering. *Asian English Studies*, 15, 125-139.
- Kobayashi, I. (2008). "They speak 'incorrect' English": Understanding Taiwanese learners' views on L2 varieties of English. *Philippine Journal of Linguistics*, 39, 81-98.
- Matsuda, A. (2003). The ownership of English in Japanese secondary schools. *World Englishes*, 22 (4), 483-496.
- Matsuura, H., Chiba, R., and Yamamoto, A. (1994). Japanese college students' attitudes towards non-native varieties of English. In D. Graddol and J. Swann (Eds.), *Evaluating language* (pp.52-61). Clevedon: Multilingual Matters.
- 羽井佐昭彦 (2015). 「フィリピン英語留学する日本人の言語態度に関する一考察」*日本大学研究紀要* (77), 15-30.
- 渡辺幸倫・羽井佐昭彦 (2014). 「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継時的インタビュー

一を手掛かりに」相模女子大学文化研究 (32), 47-66.

渡辺幸倫・羽井佐昭彦 (2015). 「フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継時的インタビュー及び参与観察を手掛かりに」相模女子大学文化研究 (33), 27-37.